
蝶々夫人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶々夫人

【Nコード】

N6798H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

明治初期の長崎。アメリカ海軍士官ピンカートンと結婚した蝶々さんは結婚から三年経っても夫を待ち続けていた。だがピンカートンはその蝶々さんのことを忘れていて新しい妻を迎えて日本に来了。そのことを知った蝶々さんは、プッチーニの不滅の名作を小説にしました。原作のオペラは本当に名作です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

蝶々夫人

第一幕 婚姻

明治維新から数年経った日本の長崎。青い海もその街並も眺めることのできる丘の上に小さな家が建てられている。周りには桜の木が咲き誇り花びらが風により漂っている。その中で家を見ながら黒い海軍の軍服を着た金色の髪に青い目の背の高い男が驚いた顔をしている。顔は朗らかな笑みを浮かべている。何処か軽薄な感じがするの否めない。

「これがかい」

「はい、そうです」

彼の隣には小柄でまだ鬚をしていそうな感じの風采のあがらない男がいる。彼は紛れもなくこの国の男だ。

「これが日本の家です」

「これが障子で」

白人の海軍の男は障子を指差して彼に問う。

「これが天井、これが襖なのかい」

「全てその通りです」

男はそう答える。

「そうか。五郎さんだったね」

「ええ」

男は海軍の男に名前を問われて答えた。

「そうです、ピンカートン中尉」

「この前までは少尉だったんだけれどね」

笑いながら自分の右手をぽんぽんと叩く。見ればそこには二本の金色の線がある。一本は太くもう一本は細い。それは中尉の階級を表すものである。

「この前なっただ」

「左様ですか」

「うん。それでだね」

彼はまた五郎に問うのであった。

「建て替えが随分楽そうな家だね」

「自由に開けたり閉めたりできますので」

五郎はその問いにまた答える。

「お好み次第にお部屋の模様替えをできますよ」

「じゃあ婚礼の部屋は」

「どちらでも」

五郎は家の二つの部屋を指差して述べた。

「そうかい。広間は」

「こちらです」

別の部屋を指差す。

「それでここからも出入りが」

「しかし。軽そうな家だね」

ピンカートンは五郎の話を一通り聞いた後で家全体の感想に入
た。

「少し強い風が来たら吹き飛ぶんじゃないのかい・この辺りは台風
も多いんだろう?」

「ああ、それは御安心下さい」

しかし五郎は笑ってピンカートンのその疑念を打ち消してみせた。

「土台から屋根まで塔の様に丈夫ですから」

「そうなのか」

「はい。ですから御安心下さい」

「だといけれど。あとは」

「使用人ですか?」

「ん。そちらの手配はどうなっているのかな」

家から目を離し五郎に顔を向けて問う。

「それでしたらもう」

五郎がぼんぼん、と手を叩くと一人の小柄な女性が姿を現わした。

緑の着物を着て黒い髪を上で結っている。穏やかな表情をしていて目は垂れ気味である。小走り気味の歩き方がピンカートンの目についた。

「この人なんだね」

「そうです。花嫁さんのお気に入りのお手伝いさんです」

五郎はそのお手伝いを手で指し示しながらピンカートンに説明する。

「名前は？」

「鈴木です」

女中のほうから答えてきた。答えると共にぺこりと頭を垂れてきた。

「どうか宜しく御願ひします」

「ミス鈴木、いや」

ピンカートンはその鈴木を見て英語を出し掛けたがそれをすぐに消して言い方を変えた。

「鈴木さんだね」

「はい、そうです」

「それでそれが日本の挨拶なんだね」

「御存知ですか」

「一応はね」

そう鈴木に対して答える。

「知ってはいるよ」

「そうですか」

「うん。ところで鈴木さん」

ピンカートンは顔をあげた鈴木の顔を見て彼女に問うた。

「どうして笑っているんだい？何か日本人はいつも笑っている人が凄く多いけれど」

「笑いは果物や花の様なものです」

鈴木はその穏やかな笑みと共にピンカートンに答えるのであった。穏やかな風が桜の花びらを運びピンカートンの前を舞う。

「花の様なもの」
「そうです。笑いは怒りの横糸を解きほぐし真珠貝の口を開き利を
もたらしめます」
「日本ではそう言われているんだね」
「はい。それは御仏の下された香水であり生命の泉なのです」
「それは誰の言葉かな」
「奥生です」
その言葉を述べた者の名を述べた。
「昔の僧です」
「仏教のだね」
「はい。御存知を」
「わかったよ。ところで五郎さん」
ピンカートンは鈴木の話が終わるとまた五郎に顔を向けて問うた。
「何でしょうか」
「花嫁さんはまだかな」
「もうそろそろだと思いますが」
「そうか。それで親類の人は多いんだよね」
「ええ。二十は超えています」
「大体二ダースつてところだね」
ピンカートンはそれを聞いて呟いた。

第一幕その二

「面倒な人はいないよね」

「まあそういう人は呼んでいませんので」

「こうピンカートンに述べた。」

「御安心下さい」

「わかったよ。じゃあ安心させてもらおうよ」

「はい。それでそちらの参列の方は」

「もうすぐ来られる筈だ」

ピンカートンがこう言うとすぐに白い髪と口髭の恰幅のいい初老の男がやって来た。温厚で思慮深そうな学者の様な顔をしている。白い服とネクタイをしている。

「ふう、長崎はいい場所だが」

彼は額の汗をハンカチで拭きながらピンカートンのところにやって来た。

「坂道が多いのが。困りものだな」

「この方だよ」

ピンカートンはその白い服の男の側まで来てにこりと笑って紹介した。

「領事のシャープレスさんだ」

「ああ、もう来ていたのか」

そのシャープレスの方もピンカートンに気付いて顔を向けるのだった。それから彼に声をかける。

「流石に早いな」

「ようこそ来て下さいました」

「登るのが大変だったけれどね」

シャープレスは苦笑いを浮かべてピンカートンに応える。

「だが。景色はいいね」

「海に街に山に」

ピンカートンはシャープレスと二人で今二人が今いる場所から見える長崎を見渡して言う。街も海も山も見事な美しさを二人に見せていた。

「アメリカにもこんな場所はそうそうありませんよ」

「そうだな。それでこれが君の家だね」

「そうです」

家に顔を向けたシャープレスの言葉に答える。

「九百九十九年借りました」

「千年生きるつもりかい？」

「契約は何時でも変えられるので」

ピンカートンは軽薄に笑ってシャープレスに述べた。

「この国では家でも契約でも思う通りになりますので」

「あまりいいことではないがね」

シャープレスはそのことには顔を顰めるのであった。

「イギリス人みたいな真似をしないでくれよ」

「わかっています。僕もアメリカ人です」

ここでも軽薄な笑いをシャープレスに見せるのであった。

「あんな連中みたいなことはしませんよ」

「だいたい」

アメリカとイギリスはお世辞に仲がいいとは言えない。これは歴史的なものだ。とりわけ海軍同士はあまり仲がいいとは言えないようだ。ピンカートンはかりにも将校であるので自重しているが兵士達はイギリス兵をライマーと呼んで馬鹿にしている。これはイギリス兵達が健康の為にライム入りのラム酒を飲んでいることから来ているのである。

「ですがアメリカ人です」

「それは今聞いたが」

「ですから」

ピンカートンはその軽薄な調子をさらに強いものにさせて言うのであった。

「世界の何処に行つても危険を顧みず楽しみ大儲けしてみせます。運を天に任せて嵐が船をひっくり返して帆柱が折れるまで突き進みどんな花でも手に入れてみせます」

「そうしたやり方が最近の我が国の評判を落としているのだが」
シャープレスは顔を顰めてピンカートンに忠告する。

「海軍士官だつたら慎んで欲しいのだが」

「まあその程度はいいのでは」

「どうか。それでは人生は楽しいだろう」

「勿論」

満面の笑みでシャープレスに答える。

「楽しくて仕方がありません」

「だが最後には報いが待っているものだ」

人生に関しての深い言葉であつた。

「それを覚悟しておけ」

「何、どんなに打ちのめされても運命を取り戻すのがアメリカ人」
しかしその忠告はピンカートンには届かない。

「ですから日本流に九百九十九年の間結婚します。何時でも自由にできるという条件で」

「全く。そんなことでは」

「まあ一杯」

五郎に手渡された杯を手渡す。

「喉も渴いておられますね」

「まあそうだが」

「ミルクポンチかウイスキー。どちらが」

「ウイスキーにしておこう」

そうピンカートンに言葉を返した。ピンカートンの気楽さに不安を感じたがそれを消す為でもある。

「バーボンだな」

「勿論。アメリカ人はイギリスのウイスキーは飲みませんので」

「それはいい」

これに関してはシャーププレスも同意した。その言葉を受けてピンカートンはシャーププレスが受け取った盃にバーボンを入れていく。それから自分のものにも入れて乾杯をするのであった。

「合衆国に栄光あれ」

「うん。ところで」

シャーププレスは一杯飲んだ後でまたピンカートンに問うた。

第一幕その三

「その花嫁さんは愛しているんだらうな」

「まあ一応は」

「一応!？」

「恋の程度にもよりますね」

「ここでも軽薄なピンカートンであった。」

「真実の恋か気紛れか」

「それで結婚するのか!？」

「ですが彼女の無邪気さと純粹さに心を惹かれたので」

「また顔を顰めさせてきたシャープレスにこう言葉を返す。」

「それは事実です」

「しかし」

「ガラス細工の様に繊細なその姿は屏風絵の様で」

「語るその顔がうつとりとしていた。」

「あの赤く光る漆塗の背景から飛び立つ蝶々の様で。実に繊細です」

「是非捕まえてみたいと」

「そうです。それを自らのものに」

「だからそれは止めておくのだ」

「シャープレスはまた彼に忠告を送った。」

「真面目な娘なのだらう?」

「はい」

「だったら余計にだ。純粹な心を粗末にはいけない」

「しかし閣下」

「シャープレスに対して述べる。」

「僕は別に彼女を傷つけるわけではありません」

「どういうことだね、それは」

「彼女にも甘い夢を見せてあげるのです。それがどうして」

「しかし本当に結婚はしないのだらう?」

「それは彼女もわかっているでしょう」

そう思い込んでいるのである。ピンカートンは

「当然のこととして」

「だといいがな。まあいい」

「ええ、どうぞ」

シャープレスが杯を差し出すとそこにバーボンを注ぎ込んだ。

「それでこれからはどうするのか」

「暫くは彼女と一緒に。そして」

「そして？」

「アメリカに戻ったならば妻を得ます」

「本当に結婚するのだな」

「そうです」

そうした意味で彼にとっては遊びなのだ。あくまでそのつもりだ。

「さて、そろそろでしょうか」

「来たか」

「ええ、ほら」

朗らかな少女の声が聞こえてくる。

「あの声は」

「可憐な声だ」

シャープレスはその声をまず気に入ったようである。顔が綻んでいる。

「蝶々さん」

同時に女達の声も聞こえてきた。

「こつちよ。こつちに花達が」

「ええ、わかっているわ」

その蝶々さんの声も聞こえてきた。

「春ね、今は」

「そう、春よ」

「蝶々さんの為にある春よ」

そう女達に言われている。だがまだ姿は見えはしない。

「海の上にも山の上にもすっかり春が満ちて」

「その中で蝶々さんは」

「ええ。私は世界中で一番幸せよ」

「そうか」

シャープレスはその声を聞いて呟く。

「それが続けばいいが」

「私は愛に誘われて楽しい家の入り口に来ているのね」

「もうすぐだ」

ピンカートンがにこやかな笑みになる。

「僕のここでの奥さんが来るんだ」

「ここには生きている人も御先祖様のも全ての幸福があるのね」

「蝶々さんに幸せがありますように」

「これからも。ずっと」

「ええ。きつとね」

「来ましたよ」

桜色の下地に赤い蝶々をあしらった服を着た小柄な少女だった。

黒く切れ長の神秘的な輝きを持つ目があり白く整った、人形の様な顔立ちをしている。髪は見事に上で結っておりその白いかんざしが黒い髪の中に目立つ。一目で心を奪われてしまう可憐な少女であった。

「この娘だね」

「はい、ピンカートン中尉ですネ」

「うん」

ピンカートンは少女の問いに答えた。

第一幕その四

「僕がそうだよ」

「はじめまして」

少女はピンカートンが名乗るとペこりと頭を下げた。

「私が蝶々です」

「蝶々さんだね」

「そうです」

そう名乗るのであった。

「そう呼んで下さい」

「わかったよ。じゃあ蝶々さん」

「ええ」

にこやかな顔でピンカートンに応える。

「山道は疲れたかな」

「いえ」

ピンカートンのその問いにはにこりと笑った後でその首を小さく横に振るのであった。

「別に。それは」

「そう。だったらいいけれど」

「待つ時の方が辛い程です」

「そうか。君はいい娘だね」

「有り難うございます」

「それで蝶々さん」

今度はシャープレスが蝶々さんに声をかけてきた。それまで彼は周りの日本の女達を見ていたがそれを終えてあらためて蝶々さんに顔を向けたのである。

「綺麗な御名前ですが」

「私の名前がですか」

「そうです。お美しい」

名前だけでなくその姿も褒めていた。これは彼の本心である。

「それは本当の御名前でしょうか」

「いえ」

だがその問いには首を横に振るのであった。

「これは。また別で」

「そうなのですか。それでお生まれは」

「ここです」

長崎というのである。

「ここで。長く続いている家でした」

「家でした」

日本語に通じているシャーププレスにはその言葉の意味がわかった。

「そうでしたか」

「私は。今は芸者なのです」

蝶々さんは寂しげな笑みを浮かべて己の素性を語りだした。

「どんな者でも立派な素性でないとは言いません。けれどもどんなに

丈夫な檜の木も大風の前では折れてしまうもの。ですから」

「そうだったのですか」

「はい」

「それですね」

シャーププレスはさらに蝶々さんに問うた。まるで彼女の全てを知るかのように。

「兄弟はおありですか？」

「いえ、母だけです」

そう答える蝶々さんであった。

「父は。名誉を守って」

「名誉を守って？」

「死んだのだ」

首を傾げたピンカートンにシャーププレスが小声で囁いた。

「聞いているな。日本では武士は名誉を守る為に切腹する」

「ああ、あれですか」

話には聞いているがそれだけだ。だからピンカートンは頷くことしかできない。

「それで本当に」

「多くは聞くな。いいな」

「わかりました。それは」

「よし。それでですね」

また蝶々さんに顔を戻す。

「お幾つでしょう」

「幾つに見えますか？」

「十歳！？まさか」

これは蝶々さんの背から見たものである。アメリカ人の彼等から見ればそこまで小柄なのだ。

「いえ。十五です」

「十五歳！？」

ピンカートンはそれを聞いて思わず声をあげた。

「それはまた」

「老けて見えますか？」

「いや、全然」

ピンカートンは慌てて首を横に振ってそれを否定する。

「そんなに若いんだ。いや」

「幼いな、まだ」

「ええ」

そしてシャープレスの言葉に今度はその首を縦に振るのであった。

第一幕その五

「その通りです。まだ遊びたい盛りで」

「甘いお菓子も欲しいだろうな」

そんな話をしている間に客人達の紹介が五郎によって行われる。

その中でシャープレスはまたピンカートンに対して声をかけてきた。

「君は幸福だ」

「有り難うございます」

「私はここまで可憐な娘を見たことがない。それに心もいい」

「そうですね。それはわかります。彼女の異国情緒が私を惹きつけました」

「それだけか」

「?何か」

ここでもわかっていないピンカートンであった。

「どうかされましたか?花の美貌が私を捉えているというのに」

「あれがアメリカの人」

「アメリカの武士なのね」

離れたところから女達がピンカートンを見て話をしている。

「綺麗な顔をしているわね」

「そうですね」

「けれど」

だが彼等は話をしている。

「何か奇麗過ぎて」

「怖いかも」

「いいか?」

またシャープレスはピンカートンに対して忠告するのであった。

「これから君が彼女とのことを真面目に考えていないのなら大変なことになるぞ」

「またそれですか」

「何度でも言う」

真剣な顔のシャープレスに対してピンカートンは少しうんざりした顔になっている。だがそれでもシャープレスは彼に対して言うのであった。

「彼女は我々を信じきっているのだしな」

「お母様」

蝶々さんは今度は彼女によく似た中年の女性を連れて来ていた。

「こちらが私の」

「そう。こちらが」

「ええ。嫁入り道具はあるわね」

「ええ。こちらに」

母親が出してきたのは黒い漆塗の箱であった。そこには舶来のもも日本のものも両方ある。ピンカートンもそれを見ていた。

「ハンカチにパイプに」

「帯止に鏡に扇子です」

「うん。あとは」

箱とは別にあるものに気付いたピンカートンであった。

「あの壺は何かな。あの紅い壺は」

「我が家の家法の一つです」

「そうなのか。あとは」

「ここで長い箱に気付いた。

「あれにも家宝があるのかな」

「そうです、私の大切なものです」

急に蝶々さんの顔が真剣なものになった。その顔で答えるのであった。

「大切なもの？」

「父の形見です」

「まさか」

シャープレスはそれを聞いて察した。

「あの長さからすると」

「ええ、そうです」

五郎がここでシャープレスとピンカートンに囁いた。

「蝶々さんのお父上は主の命であるの刃で切腹されたのです」

「そうだったのか、やはりな」

シャープレスはそれを聞いて頷いた。

「だからか。宝なのは」

「本当なのかな」

ピンカートンはそれを聞いてもまだ信じられない顔である。実際に首を傾げる。

「日本人はわからないな。自害するなんて」

「我々にはわからないこともある」

またシャープレスはピンカートンに忠告するのであった。

「それを良く憶えておくのだな」

「よくわからないけれどわかりました」

「ここでもピンカートンの返事は軽いものである。

「さて。もう何も無いみたいだけれど」

「あの」

ピンカートンが宝物が何もないのを確かめているとそこに蝶々さんがまた声をかけてきた。

「何かな」

「実は昨日」

「うん」

「教会に行つて来たのです」

「教会にかい!？」

「はい」

蝶々さんはおずおずとした小さい声で言ってきたのだった。彼にだけ聞こえるよう小さな声で。

「誰にも言っていないですが」

「ということとはつまり」

これが何を意味するのかわからないままでもなかった。ピンカート

ンはそれを聞いて納得した顔になって頷くのであった。

「はい。アメリカはクリスチャンですよね」

「勿論そうだよ」

ピンカートンにとってはこれは当然のことである。しかし日本ではキリスト教は解禁されたばかり。教会もこの長崎にやっと出来たばかりだったのだ。

第一幕その六

「だからです。貴方の為に」

「そうだったのか。けれどそれは」

「誰も知りません」

また小声でピンカートンに囁くのだった。

「私以外は貴方だけです」

「そうか。やっぱり」

「全ては貴方の為にです」

またそれを告げる。

「宜しいでしょうか」

「うん、嬉しいね」

口ではこう言うが心からはわかってはいない。やはり軽薄な彼であつた。

五郎は蝶々さんとピンカートンのそうしたやり取りに気付くことはなく神主を呼んでいた。日本の神道の神主である。ピンカートン達から見れば実に変わった格好である。

「話には聞いていたけれど」

「驚くものではないぞ」

シャープレスが驚くピンカートンに囁く。

「日本では普通なのだからな」

「これもですか」

「そうだ。さて」

そんなことを話している間神主が準備を整えた。そのうえでピンカートンと蝶々さんの間に立って婚姻の誓いを読み上げるのであつた。

「戦艦リンカーン砲術士ベンジャミン」
「フランクリン」
「ピンカートン中尉」

「はい」

ピンカートンの今の役職まで読み上げられる。

「長崎大村の蝶々さんが新郎の自らの意志に基く権利と新婦並びに親類一同の承諾によつて目出度く夫婦の契りを結ぶことをここに認めます」

「それでは」

「ここで五郎が出る。」

「今まではここで終わりでしたが何分色々変わりました」

変わった理由は明治維新により様々な書類手続きの必要ができたからである。西洋の形式を取り入れた結果なのだ。

「御署名を。まずは」

「僕だね」

そうしたこともわかっているピンカートンが最初に応えた。

「それじゃあ」

「はい、こちらに」

「うん。じゃあ」

彼が最初にサインをする。差し出された筆は断つてシャーププレスの差し出した万年筆を使って英語で自分の名前を書き込むのだった。何処か細く軽い筆跡だ。

「これでいいね」

「有り難うございます。それでは次は」

「私ですね」

「そうです」

今度は蝶々さんの番だった。蝶々さんも静かに署名する。彼女が筆で優しい字で書くのだった。優しいがしっかりとした筆跡であった。

「これで終わりです」

「蝶々夫人ね」

「そうね」

一緒にいた女達は蝶々さんが署名を終えたのを見てくすくすと楽しげに笑いながら言い合う。そこには何の悪気もないが蝶々さんは

彼女達に少しむくれて言うのだった。

「蝶々夫人じゃないわ」

「じゃあ何なの？」

「ピンカートン夫人よ」

誇らしげに言う。

「いいわね。蝶々夫人じゃなくて」

「ピンカートン夫人なのね」

「そう呼んでね。いいわね」

「わかったわ。それじゃあ」

女達もそれで納得する。シャーププレスは一連のやり取りが終わったのを確かめてからまたピンカートンに対して声をかけるのであった。

「では私はこれでな」

「帰られるのですね」

「あまり領事館を空けておくこともできない」

彼も忙しい身なのだ。

「だからな。これで」

「わかりました。それでは今日は有り難うございました」

「うん。しかし」

くどいと思われようとも考えた。そのうえでまた彼に告げる。

「くれぐれも。自重するようにな」

「やれやれ、またそれですか」

「それでもだ」

苦笑いを浮かべるピンカートンにまた言う。

第一幕その七

「何度も言うぞ。いいな」

「わかりましたよ。それじゃあ」

「うん」

シャーププレスは一同に別れを告げてその場を後にする。彼が去ってから宴は続くのであった。

皆朗らかに酒や祝いの歌を楽しむ。しかしそこに一人の僧侶が飛び込んできたのであった。大柄でかなり遅しい身体をした仏教の僧侶であった。

「仏教のお坊さんか」

「伯父様……」

ピンカートンは何だといった感じの顔だったが蝶々さんは違っていた。彼の顔を見て思わず震えだしたのだ。

「盆主さん!？」

「どうしてこちらに!？」

「蝶々よ!!!」

その僧侶盆主は蝶々さんに対して問い詰めてきた。顔が真っ赤になっっている。

「何故教会になぞ行つた!」

「えっ……」

蝶々さんはそのことを言われて顔を青くさせてしまった。

「どうしてそれを」

「本当だったか。何故だ」

「何なんだ、このお坊さんは」

ピンカートンは話がわからず五郎に小声で尋ねた。

「いきなり出て来たが」

「まあ困った人でして」

五郎も困った顔でピンカートンに答えるのであった。

「何かあるとすぐに騒ぎ出すんで。今日も呼ばなかつたんですが」
「それでも来たんだね」

「そういうことです。困ったことに」

「災厄は向こうから来るものだけれど」

ピンカートンは首を捻ってからまた述べる。

「場が乱れるじゃないか」

「さあ、言うのだ！」

盆主は蒼白になり喋れなくなった蝶々さんを問い詰め続けている。その声はまるで雷の様であり辺りを完全に圧していた。

「教会に行つた理由を！それは何だ！」

「それは……」

「まさかとは思つが」

「キリスト教に入つたのだろうか」

周りの人々もそう囁く。そうして次第に蝶々さんを冷たい目で見だしていた。

「だとしたらそれこそ」

「とんでもない話だが」

また切支丹という言葉が残っている時代だ。それへの偏見もあつたのだ。その偏見が蝶々さんを取り囲んでいく。そして彼女はそれから逃げられない状況だつた。

「言えないのか！」

「おい、五郎さん」

ピンカートンはたまりかねて五郎に言う。

「何とかできないのか!？」

「それはその」

小柄で見るからに非力な彼に出来る筈もない。彼も青い顔になつていた。

「できないのか。ならば」

彼は意を決して前に出た。そのうえで盆主に対して懐から銃を抜いた。

「その位にしておくんだ。蝶々さんを悲しませるな」

「くっ、銃か」

「そうさ。言っておくが僕は本気だ」

銃口を盆主に向けながらまた言う。

「さっさと僕の前から消えろ。さもなければ」

「くっ、わかった」

拳銃を突きつけられてはたまらない。彼も退くしかなかった。

「だが蝶々よ」

彼は去り際に言い捨てるのだった。

「もう勘当だ。いいな」

「御前が彼女を勘当しても僕がいる」

これは彼のハツタリだ。しかし蝶々さんはそうは受け取らなかつた。彼の心だと受け取つたのだ。これもまた不幸であつた。

「わかつたら帰れ。いいな」

「ふん、言われなくとも」

「なあ。何かあの人が五月蠅いし」

「そうだよな」

式の参列者達も盆主の言葉に態度を変えていた。それで口々に言しながら次第に消えていくのであつた。五郎も逃げてしまつており残っているのは蝶々さんとピンカートン、そして鈴木の三人だけになつてしまつていた。蝶々さんはそれを見てあらためて哀しい顔になるのだった。

「誰もいなくなつてしまつたのね」

「構いはしないさ」

ピンカートンが彼女に伝えて言う。頂垂れる蝶々さんに対して彼は毅然として顔を上げていた。

「僕がいるから」

「貴方が」

「そう、僕がいる」

顔を上げた蝶々さんにまた告げる。

第一幕その八

「だから。哀しむことはないよ」

「勘当されても。貴方がいてくれる」

「だから哀しくないよね」

「はい」

涙を流していたがそれでも笑顔になってきていた。少しずつ気を取り直してきていたのだ。

気付けばその二人の周りにはもう暗くなってきていた。周りを舞う桜の花びら達も少しずつだがその姿を夕闇の中に消そうとしていた。

「暗くなってきたね」

「ええ」

蝶々さんはピンカートンの言葉に頷く。彼はそつと蝶々さんの身体を自分のところに引き寄せせるのだった。

「鈴木」

ここで蝶々さんは鈴木に声をかけた。

「はい」

「着物を用意してくれるかしら」

「あの着物ですね」

「ええ、そうよ」

静かに鈴木に答えた。

「あの着物を」

「わかりました。それでは」

鈴木は蝶々さんの言葉を受けてまずは家の中に入る。そうして暫くして黒い木箱を持って来た。そのうえで蝶々さんの側に控えるのだった。

「ここに」

「これで。夜の用意と整いました」

「これでだね」

「そうです」

ピンカートンにも答える。

「夜も。これからも貴方と共に」

「そうだね。もうすぐ夜になるんだね」

「貴方と一緒にいられる時間がはじまるのです」

蝶々さんはそれが永遠だと思っている。彼女は。

「今から」

「僕が側にいるよ」

ピンカートンも何気なくそれに合わせて言うのだった。軽いといふよりは特に何も考えず。

「だから。哀しみを完全に忘れてね」

「はい。貴方の妻になって」

「やっぱり日本に来てよかった」

ピンカートンは無意識のうちに英語を出していた。だからこれは蝶々さんにはわからなかった。

「三ヶ月の間でも。こんな可愛い娘が一緒なんだ」

そう呟いてから蝶々さんに向き直る。そのうえで彼女に言うのだった。

「蝶々さん」

「はい」

彼に言われるのならば。蝶々さんも受け入れるのだった。うっとりとした顔で。

「今こそ君は僕のものになるんだ。今は桜色の衣だけけれど」

「それが」

「白くなるだね」

「そうです。夜になれば」

そう答える。既にその用意もできている。

「その白い衣に黒髪をなびかせた君が見たい。いいね」

「喜んで」

うっとりとして答える蝶々さんだった。

「そんな私は何に見えますか？」

「月姫に」

ピンカートンはうっとりとして答える。

「大空を渡る雲から降りて来る月姫様そのものだよ」

「私が。月に」

「そう。君は月だ」

また言ってみせる。

「輝きを受けて人の心を捉える月なんだよ」

「この私が。月なら」

「僕はそれを捉えて白いマントに包んで大空の国へ連れて行く使者だ」

「貴方は。そうなのですな」

「今からそうなるんだ」

ピンカートンもまたうっとりとした声で言うのだった。

「君と一緒にになって」

「私と一緒に」

「だから。言って欲しい」

そつと蝶々さんに囁くのだった。

「愛していると。いいね」

「貴方を」

「そう。月は燃える心を鎮める言葉を知っている筈だから」

じつと蝶々さんの目を覗き込んでいる。その黒く神秘的に輝く瞳を。

「だから。さあ」

「けれど私は」

「駄目なのかい？」

蝶々さんが拒む様子を見せたので彼も悲しい顔になる。

第一幕その九

「一言でいいんだけれど」

「それを言えば私は死んでしまっわ」

「どうして？」

「あまりにも恥ずかしくて」

ピンカートンから目を逸らしての言葉だった。それと共に頬を紅に染める。

「どうしても。言えないのよ」

「僕は君のその言葉を待っている」

それでもピンカートンは言う。

「だから。さあ」

「貴方がいるだけで」

そう言ってなおも拒む蝶々さんだった。

「だから。御願ひ」

「けれど僕は」

それでもピンカートンはなおも引き下がらない。

「一言だけでいいから。だから」

「聞きたいの？」

「そうさ、君の言葉を」

「こう言って蝶々さんの視線を追う。

「聞きたいんだ。是非共」

「貴方はとても素敵な方」

蝶々さんは今度はピンカートンの容姿について述べた。

「背が高くて笑顔が朗らかで」

「それだけで満足なのかい？」

「そう。それだけでいいの」

慎ましげな様子を見せてきた。

「もうそれだけで。私は」

「何という慎ましい人なんだ」

ピンカートンはそのことに感激さえする。

「では僕はそんな君を捕まえる。それでいいね」

「捕まえるのね」

「そうさ」

蝶々さんに答える。

「そしてずっと離さないよ」

「そういえば」

ピンカートンの捕まえるという言葉であることを思い出した蝶々さんだった。

「海の間ごろうでは捕まった蝶々は」

「何だい？」

「ピンに刺されて箱に入れられるのね」

怯えた様子と声になる。蝶々という名前から蝶々達を連想したのだ。

「そしてそのままずっと」

「それは何故かわかるかい？」

ピンカートンは甘い笑みを浮かべて彼女に問うた。

「どうしてなの？それは」

「二度と逃がさない為なんだよ」

言葉も甘いものになっていた。

「二度とね。だから僕も」

「あっ」

その言葉と共に蝶々さんを抱き締めた。強く、激しく。

「二度と離さない。だから行こう」

「家の中に」

もう蝶々さんもそれはわかっていた。その場を支配する愛が彼女にそれを教えていたのだ。

「穏やかな夜だ」

もう夜になっていた。空には静かに輝く無数の星達がある。濃紫

の空に赤や青、白、緑の星達が瞬き蝶々さんを照らしていた。

「その夜の中で」

「私達ははじまるのね」

「そう、星達に祝福されて」

二人は同じ空を見ていた。だがそれはそれぞれ違う目で見ていた。蝶々さんは完全に同じ目で見ていると思っていたのだが。

「はじまるんだ。さあ、中へ入ろう」

「二人の愛の中に」

うつとりとして抱き合いやがて家の中に消える。灯りもなく静かな夜がはじまる。それが蝶々さんの愛のはじまりであった。

第二幕その一

第二幕 ある晴れた日に

ピンカートンとの結婚から三年が経った。蝶々さんは十八になり二人の間にできた小さな男の子もいる。しかしそこにピンカートンの姿はなく親子と鈴木だけで静かにあの丘の上の家で暮らしているのだった。

その静かな緑の丘の上の家で。鈴木は蝶々さんに声をかけていた。

「蝶々さん」

「何かしら」

二人はそれぞれ日本の着物を着ている。鈴木は緑の、蝶々さんは赤と桜色の。それぞれの着物を着ていた。二人は家の庭先で話をしていた。座っている蝶々さんに鈴木が声をかけてきたのだ。

「お金のことですが」

「あとどれだけなの？」

「これだけです」

そう言つて懐から出してきたのは本当に僅かなだけの金貨であつた。

「もう。これ以上は」

「そうなの。それだけ」

「あの人が残していったのはもう」

鈴木は寂しげな様子で答える。

「これだけしか残つてはいません」

「けれどあの人はまた帰つて来るわ」

蝶々さんは明るい声で言うのだった。じつと上を見上げて。

「それももうすぐね。だから」

「けれど」

そんな蝶々さんを見て鈴木は余計不安を感じるのだった。

「本当にそんなことが」

「あの人を疑っているの？」

「いえ、それは」

不審には思っている。しかしそれを口に出して言える筈もなかった。

「そんなことはありませんが」

「だつたらいいわ。いい？」

蝶々さんは鈴木に顔を向けてきた。少し厳しい顔になっている。

「あの人は言ったのよ。駒鳥が巣を作る晴れやかな季節になったら帰って来るって」

「駒鳥がですか」

「それは今よ」

そんな季節になっていた。それが今なのだ。

「紅い、私に似合う花を持って戻って来るって」

「そうなのですか」

蝶々さんのその話を聞いても鈴木は不安を拭いきれなかった。

「だといいいのですけれど」

「まだあの人を疑うの？」

「いえ、それは」

蝶々さんの強い声と視線に思わず口ごもる。

「そんなことは」

「お待ちしています、私も」

「だといいわ。ねえ聞いて」

ここまで話したうえで。鈴木に告げるのだった。前を向き直つて。ある晴れた日に海の遙か彼方に煙が一筋。やがて船がやって来るわ

蝶々さんは今丘から見えるその海を見ていた。山に囲まれた青いその海を。

「その白い船が港に入ると礼砲が放たれて。あの人が帰っていらしたことを私に教えてくれるの。それでも私が迎えに行かないわ。どうしてだかわかる？」

そう鈴木に塔。

「向こうの丘の端で待つからよ。どんなに待っても辛くはないわ。やがて街の人々の間から一人だけ抜け出して丘の上を登って来るのはあの人。私の名を、蝶々さんと呼んでやって来るの。けれど私は隠れるの。何故かという」と

うつとりとした言葉だ。完全にそこに自分を置いている蝶々さんだった。

「からかうのよ。ちょっとだけ。だって久し振りに会うのだから嬉しくて死にそうだから。あの人が『美女桜の様な可愛い奥さん』と呼ぶのを聞きながら。あの人私が私につけてくれた仇名を」

そこまで話してまた鈴木に顔を向ける。そのうえでまた言うのだった。

「貴女には話しておくけれどきつとそうなるから。私は信じているのよ」

「そうなのですか」

「ええ」

またうつとりとした顔で言う。

「きつと。だから」

「ああ、こちらですね」

そこに誰かが来た。見れば五郎とシャープレスだ。

「五郎さん、それにシャープレスさん」

「どうも」

五郎は顔を自分に向けてきた蝶々さんと鈴木に下卑た笑みを向ける。シャープレスはその後ろで深刻な気難しい顔をしている。

第二幕その二

「鈴木」

「はい」

鈴木に顔を向けてお茶を出すように言う。

「御願いな。二つ」

「わかりました」

鈴木はそれを受けて家の奥に消える。蝶々さんはそれを見届けてからまた二人に顔を戻すのであった。そのうえで二人に対して問う。

「お久し振りです。今日は何の御用でしょうか」

「はい」

シャーププレスが深刻な顔のまま蝶々さんに応えた。

「実はですね」

「何かあったのですか？」

「ピンカートンから便りがありました」

「えっ!?!」

蝶々さんはそれを聞いて思わず立ち上がった。そのうえでシャーププレスに問うのだった。

「それは本当ですか!?!」

「はい、そうです」

シャーププレスは一気に朗らかになった蝶々さんに答える。

「そうですか。それでは」

「何か」

「アメリカでは駒鳥は何時巢を作るのですか」

「駒鳥!?!」

シャーププレスは急に駒鳥と聞いて目を丸くさせた。

「あの、それは」

「あっ、すみません」

彼の驚いた顔を見て蝶々さんは気付いた。それで説明するのだっ

た。

「実はですね」

「ええ」

「そちらの方は」

「御存知ありませんか」

「申し訳ありません」

そう答えて蝶々さんに謝罪するのだった。

「鳥について専門的に学んだことはありませんので」

「そうだったのですか」

「はい、それで」

さらに深刻な顔になるシャープレスだった。

「そのピンカートン中尉のことですが」

「主人が何か」

「あのですね」

言いにくい顔になって話を止めるのだった。

「何ですが」

「あっ、そうです」

シャープレスが言うに言えず困っていると蝶々さんが自分から言ってきた。

「実はですね」

「はい、何か」

「困ったことがあります」

顔を顰めさせて言ってきたのだった。

「ちょっと宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

蝶々さんに話すように言う。それでまた時間を稼ごうという彼の考えもあった。

「何かありましたか？」

「山鳥様です」

「ああ、公爵様ですか」

華族でありかつては京の都で公卿であった。この時代になって事業で成功しこの長崎に邸宅を移してきている人物である。

「主人が帰ってから何かと私に贈り物をしてくれるのですが」

「左様ですか」

「いい方ですよ」

ここで五郎がシャーププレスに囁いてきた。

「親類からも見捨てられた蝶々さんを気遣ったことなんです」

「そうなのか」

シャーププレスはそれを聞いて少し安心した顔を見せた。

「蝶々さんにもそうした人がいてくれるのか。神は見捨ててはおられぬか」

「今日もこちらへ向かっておられます」

「今日も」

蝶々さんは五郎の今の言葉を聞いて顔を顰めさせた。

「もう沢山ですのに」

「いや、これは」

だがここでシャーププレスは言うのだった。

「蝶々さんにとっては」

「私にとっては!？」

「来られましたよ」

シャーププレスがその先を言おうとしたところで。ダークグレーのお洒落な洋服に身を包んだ品のいい男がやって来た。端整で品のあつる顔立ちをしていて黒い髪を綺麗に後ろに撫で付け整った口髭を生やしている。彼がその山鳥公爵である。長崎では名士でもある。

第二幕その三

「その山鳥公爵です」

「こんにちわ、蝶々さん」

公爵はにこりと笑いながら蝶々さんの方にやって来た。シャープレスから見ても品のある確かな男である。その彼が蝶々さんのところにやって来たのだ。

「お元氣そうで何よりです」

「はい」

だが蝶々さんはそんな彼を憮然とした顔で迎えるだけだった。

「それでですね」

「あの話は何度もお断りした筈です」

「お断り!？」

「実はですね」

二人のやり取りを聞いて目をしばたかせたシャープレスに五郎が囁いてきた。

「公爵様は先日奥様に先立たれてしまして」

「ふむ」

「それで新しい奥様を探しておられるのです」

「それで蝶々さんをか」

「悪い話ではないですよね」

「悪い話どころか」

シャープレスは首をゆっくりと横に振って述べる。

「そんないい話は滅多にないよ」

「そうですね。私もそう言っているのですが」

聞き入れないのだ。蝶々さんの心はそこにはないのだ。

「蝶々さんはどうしても」

「そうなのか」

「はい。それで困っています」

彼は言うのだった。

「どうしたものやら」

「私と共にこの丘を降りましょう」

公爵は優しい声で蝶々さんに語り掛ける。あくまで穏やかな物腰だ。

「そして一緒に二人で」

「いえ、私は」

しかし蝶々さんは公爵のその申し出をきっぱりと断るのだった。

「ずっとここにいます」

「まだ待たれるのですか」

「はい」

またはつきりとした返事だった。

「私はあの人の妻ですので」

「それを言うべきなのだが」

シャープレスはそんな蝶々さんを見てその顔に浮かび出ている深刻さを濃くさせた。苦惱さえその顔には強く浮かんできていた。

「どうしても。言えはしない」

「公爵様のお気持ちはわかっています」

それは蝶々さんにもわかっている。

「ですが。それでも」

「蝶々さん」

シャープレスがここで出て来た。

「実はですね」

「はい、何か」

「いや」

本人に対して言おうとすると。やはり言えないのだった。ついつい顔を下に逸らしてしまふ。

「それは」

「蝶々さん」

彼が言えないでいると公爵がまた言ってきた。哀しい顔と声で。

「また来ます。私は待っていますので」

「何度来られても」

「私の心は本物です」

それは彼だけでなく蝶々さんもわかっていた。しかし。

「だからこそ。それでも」

「公爵」

その彼に五郎が声をかけてきた。

「今日はこれで」

「うん、済まないな五郎さん」

「いいですよ。それじゃあ」

「では蝶々さん」

公爵は残念な顔で五郎を連れて最後の挨拶をするのだった。

「また」

「はい。ですが私は」

どうしても彼を受け入れない蝶々さんだった。一礼した二人が帰るとそこに残っているのはシャープレスだけになってしまった。彼はそのことにえも言われぬ追い詰められた感情を抱いたがそれでもこの丘の上に残った。彼も己の責務があったからだ。

「先程のお話ですが」

「ええ」

話はそこに戻る。シャープレスは蝶々さんに対して言うのだった。

「今日ピンカートンの船が長崎に入ります」

「えっ!？」

それを聞いた蝶々さんは思わず顔を真っ赤にして声をあげる。鈴木も同じだった。

第二幕その四

「あの方が。遂に」

「はい。それでですね」

「お便りですよね」

「ええ、それです」

そちらにも話がいく。だがそれと共にシャープレスの顔に浮かび出ている憂いがさらに濃くなる。鈴木はそれに気付いたが何故そうなっているかまではわからない。蝶々さんは喜びで全く気付いてはいない。

「そのお便りは」

「こちらです」

懐から一通の手紙を出す。それを蝶々さんに手渡すと彼女は満面の笑みでそれを抱き締めるのだった。

「あの人からの。私への」

「読めますか？」

「それは」

実は英語は話せるようになったが読むまでには至っていない。そこまではいかなかったのだ。

「私が読みましょうか」

「御願ひできますか？」

「はい、それでは」

「わかりました。それでは」

シャープレスは読みはじめる。蝶々さんと鈴木はそれをじっと聞くのであった。

「友よ」

「領事様のことですね」

「はい。あの美しい花の様な娘を尋ねてあげて下さい」

「私のことね」

「そうです。そして」
さらに読むのだった。
「あの幸福な日々から三年が過ぎました」
「あの方も覚えていたのね」
「もう蝶々さんは私のことなぞ忘れてしまっているでしょう」
「まさか、そんな」
蝶々さんはそれは否定する。
「そんなことは」
「もし蝶々さんが」
ここでシャープレスの言葉が止まった。
「終わりですか？」
「いえ」
シャープレスは蝶々さんのその問いには首を横に振る。
「まだです」
「ではお読み下さい」
「……はい、それでは」
仕方なく読みだす。言葉が続ける。
「まだ好意を持って迎えてくれるのなら」
「何て優しい御言葉」
蝶々さんはそう捉えたのだった。
「そう言って下さると」
「あなたに彼女が色々な仕度をするよう御願ひします」
「お帰りになられるのね」
「そうです」
今のシャープレスの言葉は自分の言葉であった。
「ですが」
「何か？」
「まだ手紙には先がありません」
何とか腹の底から出すような声であった。
「読みましょうか」

「ええ、どうぞ」

何もわからない蝶々さんはこう言うだけであった。

「御願います」

「はい」

言葉が少なくなっていた。何とかそれでも出したような言葉であった。

「それはですね」

「続きがあるのですよね」

「ええ」

それは認める。しかし。

「あの、蝶々さん」

「何か？」

不意に話を変えてきたのであった。

「実は。お話したいことがあります」

「何でしょうか」

蝶々さんもそれを聞くのであった。

「あの、あの方ですが」

「あの方といますと」

「山鳥公爵です」

彼もまた公爵の名前を出すのだった。

「いい方だとは思いませんか？」

「私もそう思います」

彼女もそれはわかっている。しかしなのだ。

第二幕その五

「ですが」

「そうですね。わかりました」

「私が見ているのはあの方だけです」

「こうまで言う蝶々さんであった」

「ですからそれはありません」

「わかりました。……くっ」

シャープレスはあらためて歯噛みする。そうせざるを得なかったのだ。

「ピンカートン、どうして」

「それで領事様」

歯噛みするシャープレスに気付かずまた問うてきたのであった。

「まだ何かありますか」

「もう一つ御聞きしたいことがあります」

彼はまた言ってきたのだった。

「あのですね。若し彼がです」

「あの方ですね」

「そうですね。若しもです」

念入りにこう前置きするのだった。蝶々さんを気遣って。

「帰って来なかったら。どうされますか」

「え……」

これは蝶々さんに対して言うてはならない言葉だった。その顔が強張り言葉も止まる。そんな彼女を見てシャープレスも悟るしかなかった。その悟った彼に蝶々さんの言葉が届く。

「そうなれば私に出来ることは二つだけです」

「二つですか」

「そうですね。芸者に戻るか」

まずはそれであった。これが彼女にとって不本意極まるものであ

るのは言うまでもない。

「そして」

「そして？」

「もう一つは。死ぬだけです」

「馬鹿な」

シャープレスは蝶々さんのその言葉を受けて色を失った。

「貴女は死んではなりません。そんなことを仰らないで下さい」

「私はもうあの方と一緒にでなければ生きる意味がないのですからそれが蝶々さんの偽らざる心の言葉だった。」

「そうでなければ。どうして」

「そこまで。貴女は」

「御覧になって下さい」

困り果てた顔になったシャープレスに対してまた声をかけるのであった。

「鈴木」

「はい」

次に鈴木に声をかける。すると鈴木はそれ応えるのだった。

「あの子を連れて来て」

「わかりました」

鈴木は一旦後ろに消えてそれから三歳程度の子供を連れて来た。見れば肌と顔は日本人のものだが髪は金色で目は青だった。それだけで誰の子供かわかる。

「彼の……」

「そうです、あの人と私の子供です」

その金髪と青い目が何よりの証拠だった。

「御覧になりましたね」

「はい、よく」

「この子がいるから。あの方はきつとここに」

「ですが」

シャープレスは蝶々さんの信じる気持ちに対して残酷な言葉をか

けるしかなかった。かけたくはない彼の心は押し殺すしかなかった。

「彼はそのことを御存知で？」

「いえ」

蝶々さんは首を横に振った。

「あの方が日本を去られてから生まれた子です」

「そうですか、やつぱり」

「だからこそ。教えて頂きたいのです」

こうシャープレスに頼み込んできた。

「あの方に。子供がいるのだと。そうすれば」

「戻って来るといいますね」

「あの方の子供なんですよ」

それこそが蝶々さんの最大の心の拠り所であった。この子こそが。

「雨の日も風の日もこの子を抱えて歌って食べ物や着物を稼いで同情する人達に悲しい歌声を聞かせて不幸な母親にお恵みをと叫ばせるのですか？」

「それは……」

そんなことが言えるシャープレスではない。俯いて黙ってしまふ。

「悲しい運命の蝶々はこの子の為に踊りまた芸者に戻って楽しみの歌は悲しみの歌になって。そんなことをする位なら」

「駄目だ、もう」

シャープレスは今にも泣きそうになる。それだけは必死に堪えて言うのだ。

第二幕その六

「私には。言えない」

「ほら、坊や」

その悲しみに耐えられないシャープレスに既に自分の言葉で泣いてしまっている蝶々さんが声をかけるのだった。

「領事さんに。お別れの挨拶を」

子供はそれに応えてシャープレスに手を振る。シャープレスはそんな子供を見て言うのだった。

「綺麗な金髪ですね」

「有り難うございます」

「名前は？」

「今は悩みです」

蝶々さんが子供に代わって答えてきた。泣いたままの笑顔で子供を見ながら。

「けれどもあの方が帰ってきたら喜びに変わります」

「喜びにですか」

「そう、喜びに」

またシャープレスに告げる。

「これでおわかりですね」

「わかりました。それでは」

「はい、また」

礼儀正しくシャープレスに挨拶を返す蝶々さんだった。

「御会いしましょう。それでは」

「お元気で」

シャープレスは丘の上から姿を消した。蝶々さんは彼を見送ってからまた子供を見る。その子に優しい言葉をかけるのだった。

「もつすぐよ」

にこやかな、あやす顔での言葉だった。

「もうすぐお父さんが帰って来るわよ」
「あつ」

この時鈴木が声をあげた。海の方から砲声が届いてきたのだ。
「蝶々さん、あれは」

「大砲の音ね」

「そうです、軍艦の大砲の音です」

「そう蝶々さんに告げる。」

「あれはやっぱり」

「わかってるわ、あの人よ」

その声が弾んでいる。もう彼女にはわかっているのだ。

「あの人が来ているのよ」

「これを」

ここで鈴木は望遠鏡を出してきた。それを蝶々さんに差し出すのだった。

蝶々さんはそれを受け取る。そうしてそれで海の方を見ると。見る見るうちにその顔が笑顔になってきた。

「見えますか？」

「見えるわ」

その声が弾んでいた。

「アメリカの旗が。本当に来られたのよ」

「そうですか、本当に」

「ええ、帰って来られたわ」

望遠鏡で海の方を眺めながら言葉を続ける。

「信じていたわ。けれど」

「だからこそ嬉しいのですね」

「ええ」

望遠鏡を下ろす。その目からは歡喜の涙が溢れ出ていた。そのう
えで顔は笑っているのだった。

「本当に。やっと」

「蝶々さん」

「鈴木」

自然と二人は向き合う。にこやかな顔を向け合って言い合うのだ
った。

「あの桜の小枝を揺さぶりましょう」

「桜の小枝をですね」

「そう。それで」

蝶々さんは言う。

「花の雨を浴びたいわ。薰り高い花の雨の中で燃える様なこの想いを
浸したいのよ」

「そうですね。では」

「それであの方は」

喜びの中でピンカートンを想うのだった。

「どれ位で来られるかしら」

「さあ」

「一時間位かしら」

蝶々さんは最初こう予想を立てた。

「もっとでは？」

「じゃあ二時間ね。その間に」

早速動きだした。一歩前が出る。

「ハナを採って来て一杯にしましょう。ちょうど夜空が星で一杯に
なるみたいに」

「あんな感じですね」

「そう、お花を」

また鈴木に告げる。もう二人共動きだしていた。

「桜だけでなくすみれも桃もジャスミンも」

「他には？」

「どのお花もよ」

また言ったのだった。

「草むらに咲く野花も草花も木に咲くお花も何でも」

「全部ですか」

「ええ、そう」

「けれど蝶々さん」

鈴木はうきうきした気持ちの中にながらも少し冷静に蝶々さんに対して言うのだった。

第二幕その七

「何かしら？」

「そんなにしたらお庭が冬みたいになつてしまえますけれど」

「それでもよ」

「わかつちてもだった」

「それでも一杯にしたいのよ。あの人が帰って来るのよ」

「だからですか」

「そうでないといふことはしないわ」

もう花を摘みだしている。その花をあちこちに散りばめる。

「こうしていつてね。奇麗にしたいのよ」

「そうですね。それでは私も」

「三年待ったのよ」

鈴木も花を摘み取つて散りばめだした。その鈴木にまた言うのだ。

「その間流した涙が土を濡らしたけれど今度はその土がお花を返してくれているのよ」

「薔薇の花は敷居に」

「そう、そこに」

様々な色の薔薇の花びら達が敷居に撒かれた。木の色でしかなくつた敷居が忽ちのうちに華やかな色に覆われる。

「そこに撒いて。それでね」

「次は」

「昼顔よ」

今度は庭先だった。

「そこは百合をね」

「まるで四月みたいに」

「だって。私の中では春だから」

蝶々さんにとってはそうであった。

「飾るのよ。もっと一杯のお花達で」

「庭はこれでいいですけどね」

もう庭もあらゆる場所も花びら達で飾られてしまった。まるで別の世界の様に。

「それでもまだ」

「何？」

「お化粧です」

鈴木は次に化粧を言ってきたのだった。

「そうね。どうも最近」

自分のことに目をやる。するとついつい物悲しくなる蝶々さんだった。

「悲しんだり溜息をついたりすることはかりだったから。きっと顔も崩れているわよね」

「いえ、それは」

「隠さなくていいのよ」

鈴木にこう返す。

「だって。それは本当だから」

「私はそんなつもりでは」

「それでも。今は違うわ」

今の幸せのことを想って笑顔に返った。

「やっとあの方が帰って来るから。だから」

「そうですか」

「何もかもが嬉しいわ。今まで待っていた介があったのね」

「そうです。これからはまた」

「笑顔になれるわ。それもずっと」

その笑顔を讃えている。蝶々さんの偽らざる心そのものだった。

「髪の毛にお花も欲しいし」

「はい」

鈴木が差し出したのは紅いけしの花だった。蝶々さんはそれを受け取るとすぐに自分の髪の毛にさした。銀のかんざしと共に。

「後はお化粧をして。待ちましょうね」

「は、あの方を」

「ここに来られるまで」

そう言い合って子供と共に家の中に入る。その家の中でピンカー
トンを待つのだった。何時までも何時までも。蝶々さんは待つのだ
った。

第三幕その一

第三幕 名誉を守り

その日蝶々さんは待ち続けた。しかしピンカートンは来ることはなかった。何時までも待ち続けていたが来ることはなかった。何時までも来はしなかった。

夜の帳は消え去り遂に朝日が昇る。その時まで蝶々さんは待つていたが遂に来ることはなかったのだった。

「蝶々さん」

鈴木も一緒だった。彼女は家の中の障子の向こうで一緒に正座している蝶々さんに顔を向けて声をかけたのであった。彼女の名を呼んで。

「夜が」

「もうすぐよ」

蝶々さんはまだ待つていた。

「もうすぐだから」

「それはそうですが」

「どうしたの？」

「少しお休み下さい」

まんじりとしたままの蝶々さんにこう告げるのだった。

「今は。宜しいですね」

「けれどそれは」

そう言われても従おうとしない蝶々さんだった。その顔には強情なものがあった。

「あの方が来られたら」

「その時は私がお知らせします」

「ここでも蝶々さんを気遣う言葉を述べる。

「ですから。宜しいですね」

「御願いしてもいいのね」

「勿論です」

こうまで告げる。実は鈴木は少しだけ寝入っていたので幾分かましなのだ。それで蝶々さんに休むように勧めたのだ。その間は自分が思つて。

「それで宜しいでしょうか」

「わかつたわ」

本音は違っていたがここは鈴木の気遣いを受け入れる蝶々さんであつた。

「それじゃあ。今は」

「はい、奥の部屋で」

「じゃあ坊や」

蝶々さんは優しい顔で抱き続けている我が子に顔を向けた。子供はすやすやと眠っている。その顔を見て微笑みながら述べるのだつた。

「一緒に休みましょう。お父さんを待ちながらね」

「絶対に来られますよ」

鈴木もまた優しい言葉を蝶々さんにかけるのだつた。

「ですから」

「ええ。じゃあその時には必ず起こしてね」

「わかつています。それでは」

「ええ」

こうして蝶々さんは立ち上がり我が子を抱いたまま襖を開けて奥の部屋に消えた。そうして彼女が姿を消すと暫くして二人のシルエツトが障子の向こうに見えた。それは洋服の男のものであつた。

「まさか」

鈴木はそのシルエツトを見て無意識のうちに立ち上がった。それから障子を開けるとそこには。やはりいた。待っていた彼が。

「来られたのですね。本当に」

「静かにね」

だがその彼女に声をかけてきたのはシャーププレスであつた。彼は

相変わらず深刻な顔をしてそこにいた。その顔で声まで深刻なものにさせて鈴木に告げるのだ。

「いいね、それは」

「静かに、ですか」

「そう。蝶々さんはおられるね」

「勿論です」

鈴木は彼の問いに頷いた。それから庭の中に立っている二人のところに降り立った。そうしてまた二人と話をするのであった。

「今はお休みです」

「そうか。それはいい」

ピンカートンはそれを聞いて満足気に頷く。

「とてもお疲れでしたので」

「そうか。それじゃあやっぱりこれは」

昨日の夜には風一つなかった。家中が花で飾られたままであった。シャーププレスはその花びら達を見回して言うのだった。様々な色の花々を眺めながら。

「蝶々さんが」

「それに一晩中待つておられたんですよ」

鈴木はこのことも二人に告げるのであった。

「一晩中。御主人が来られると御聞きして」

「そうか。そうだったな」

シャーププレスは彼女の言葉を聞いて頷く。

「だから。蝶々さんは」

「三年もの間。毎日港に入って来る船を見て待つておられたのです」
「見る」

シャーププレスは鈴木の話をごここまで聞いたうえでピンカートンに顔を向けてみせた。これまで碌に話すこともなく次第に深刻な顔になって話を聞いていた彼に対して。

第三幕その二

「私の言ったとおりだな」

「まさか。こんなに」

「だから言ったんだ。私が」

「こんなことになるなんて」

次第に俯いてきているピンカートンだった。鈴木はそれを見て変に思うのだった。

「一体何が」

「本当のことを言うべきだ」

シャープレスは厳しい声をピンカートンに向けた。

「それが勇気というものだ」

「それが」

「あの、どうかされたのですか？」

何を話しているのかさっぱりわからず二人に問うのだった。

「一体何を」

「君が言えないのなら私が言おうか」

「いえ、それは」

だが二人はその鈴木の前でまだ話をするのだった。鈴木はさらに話がわからなくなってきた。首を傾げ眉を顰めさせるのであった。

「私の方から」

「何があつたんですか？んっ！？」

ここで。丘の上にもう一人いることに気付いた。それは。

「女の人？」

「そうだ」

シャープレスが鈴木に答えた。

「彼の奥さんだ」

「奥さん！？その方でしたら」

鈴木は最初それこそ蝶々さんだと思った。しかしそれは違っていた。

「違う」

「違う!?!? どういうことですか?」

「彼は。アメリカで正式に結婚したんだ」

そう鈴木に告げる。ピンカー-tonは話せなかった。俯いてしまいそのままだった。見ればそこにいるのは白い洋服を着た茶色のふわふわした毛に緑の目を持つ白い肌の女だった。整った、人形のような顔をしてそこに立っている。どう見ても海の向こうの女であった。

「あの方が。嘘ですよね」

「鈴木さん」

信じようとせず自分に問うてきた鈴木にまた答えるシャーププレスだった。

「私が今まで嘘をついたことがあるかい?」

「ではやっぱり」

「その通り。ケートという」

「ケート……さん」

名前を聞いても信じられなかった。言い換えると信じたくなかった。鈴木は今自分の目の前で起こっていることを信じたくはなかったのだ。

「朝早くやって来たことにも理由があるんだ」

「理由が。ですか」

「そう。鈴木さん」

あらためて鈴木に声をかけるシャーププレスだった。

「貴女の力が欲しいのだ」

「私の力がですか」

「そう。慰めようのないことなのは私もわかっている。しかし」

「しかし?」

「子供のことは考えなければならぬ筈だ」

シャーププレスが言うのは子供のことであった。彼が思うのはそれ

しかなかった。

「あの時のままだなんて」

ピンカートンはその横で家を見ていた。その顔には深い悔恨がある。あの時のような軽薄さはもう何処にもなかった。消え果ててしまっていた。

「この花達の香りが僕を包み込む。激しい後悔の中に沈めてしまう」
「ケート夫人はいい方だ」

シャーププレスはその彼にあえて何も声をかけず鈴木に言葉をかけ続ける。

「だからきつとあの子も」

「私からあの人にお話せよと仰るのですね」

鈴木はようやく彼等が何を言いたいのか察した。ようやくであった。

「私が」

「早くあの子を」

シャーププレスは言葉を出せなくなってきていた。その心に押されて。しかしそれでも何とか言葉を出すのだった。己の責務であるから。

「三年の間本当に待っているなんて」

ピンカートンはまだ家を見ていた。悔恨は深くなるばかりだ。

「僕はもうここには」

「本当は。君を止めたい」

シャーププレスは鬼ではない。だからこう彼に告げたのだった。

「耐えられないな」

「済まない、僕は」

「ここで君が平気な顔をしていたならば私は君を永遠に軽蔑していた」

言葉は厳しいものであったが口調は違っていた。彼の心を見ていたからだ。

第三幕その三

「だが。今の君の顔は」

「済まない」

「あの時の私の言葉だったな」

シャープレスは俯きうなだれる。ピンカートンにあえて優しい声で語るのだった。今の彼をこれ以上追い込まず傷付けない為に。

「彼女は我々を信じきっていると」

「そうだった。確かに」

「一人になっても待っていたんだ」

それが蝶々さんだった。

「ずっと。ここでな」

「僕は取り返しのつかないことをしてしまった」
頂垂れたまま言う。

「今はそのことで心が」

「行くんだ」

ピンカートンに対してここから去るように勧めた。

「罪がわかったのなら。私はこれ以上は何も言わない」

「済まない、シャープレス」

応える声が泣いていた。

「もう僕は」

「わかったんだ」

声がさらに優しくなった。

「だからいい。もう」

「済まない、そしてさらば」

蝶々さんと過ごした家を見ての言葉だった。

「愛の巢、花の隠れ家。僕は自分の愚かさに耐えられず御前の前から姿を消すよ」

「それではな」

「……………うん」

シャープレスと挨拶を交えさせて姿を消す。頂垂れるシャープレスの横に今度は青い顔になったケートが静かにやって来たのだった。

「申し訳ありませんが」

「わかっております」

鈴木もまた静かに彼女の言葉に応えた。

「それでは」

「あの人の子供です」

その言葉に偽りは感じられなかった。

「ですから。きつと立派に育てますので」

「鈴木、鈴木」

だがここで。家の中から蝶々さんの声がした。

「何処にいるの？」

「どうして……………」

鈴木は蝶々さんの声を聞いて悲嘆に暮れた。

「今起きてきたの……………」

「何処なの？いるのでしょうか？」

「は、はい」

慌てて家の中に入りながら応える。草履もそぞろに脱いで。

「こいらです」

「あの方がいらしたの？」

蝶々さんは希望の中にいた。外は絶望に覆われているというのに。

「何処なの？何処におられるの？」

「それは」

「ここかしら」

鈴木より早く出て来た。そうして庭先に出たのであった。

「領事様」

「どうも」

シャープレスは目礼で蝶々さんに応えた。

「領事様がおられるということとは」

「それはその」

「あの……」

しかし鈴木もシャーププレスも答えることができない。とても。

「あの方は何処なの？それに」

ここでケートに気付いた。

「あの方は。あちらの女性の方ね」

「はい、そうです」

鈴木はその問いには答えることができた。

「綺麗な方だけれど。それでも」

庭先の周りを見回しながらまた鈴木に問う。

「あの方がおられないなんて。おられるの？」

「今までは」

「今までは」

「そうです」

「蝶々さん」

俯いてしまった鈴木に代わってシャーププレスが蝶々さんに述べる。だがその言葉は暗く沈んだものであった。それでも言うのであった。

第三幕その四

「御気を落とされずに」

「御気を！？一体」

「彼は一旦ここに来た」

「一旦は」

「そう。けれど」

言いくらい。彼がこれまで経験した何事よりも。しかし言わなければならなかった。そして彼は何とかその言葉を述べたのであった。

「もう来ない」

「来ない！？まさか」

「いえ、本当です」

絞り出す様な言葉であった。

「もう。二度と」

「二度と………」

その言葉が次第に蝶々さんの心に滲み入ってくる。その彼女にシヤプレスはまた言うのだった。

「そして。この女性の方は」

「まさか」

「………おわかりですね」

これ以上直接言うのは辛い。だから蝶々さんが察してくれたのは有り難かった。内心そのことに感謝さえしていた。そう、彼女への感謝であった。

「罪はありません、この方には」

「………わかりました」

その言葉にまた頷く。

「それは。ですが」

「御願います」

また蝶々さんに対して頼み込んだ。

「どうか。堪えて」

「私に残っているのはその一つだけなのです」

「それも。わかっています」

わかっている筈がない。しかし。それでも彼は言わなければならなかったのだ。

「ですが」

「……わかりました」

そして遂に蝶々さんも頷いた。そうするしかないのもわかっていてだった。

「それでは」

「すみません。子供は」

「きつと私が」

これまでそこにいるのが地獄に感じられ顔を蒼白にさせていたケイトも言う。彼女も己がしなければわからないことがわかっていたので。

「はい。ですが」

「ですが？」

「少し時間を下さい」

こうシャープレス達に頼んできたのであった。

「半時間程。宜しいでしょうか」

「最後のお別れなんです」

「そうです」

その言葉は半分は真実であった。しかしもう半分は隠した言葉であった。だがそれは決して口には出さないのであった。決して。

「私もでしょうか」

「ええ」

鈴木に対しても答える。

「御願ひ。どうか」

「わかりました。それでは誰に」

「御息はどうされていますか？」

「眠っています」

こうシャープレスに答えた。

「今は」

「そうですか」

「その子に最後の別れがしたいのです」

また言うのだった。

「ですから」

「はい。それでは」

「蝶々さん。私達は暫く」

「去りますので」

こうして三人はこの場を去った。蝶々さんは一人になった。一人になるとすぐに家の中に入るのであった。

「明る過ぎるし春めき過ぎるから」

障子も襖も何もかもを固く閉めながら家の奥へと入っていく。

その部屋には仏壇がある。その仏壇の前に座ると蠟燭に火を点けて静かに祈る。それから立ち上がると仏壇の反対側にある神棚に近付きそこから白い布に包まれた細長いものを取り出す。それは短刀だった。蝶々さんの家の最後の家宝、ピンカートンとの婚禮の時に見せなかったあれだ。それを静かに取り出すと鞘を抜いたのであった。

「名誉を守ることができなければ名誉の為に死ね」

座ってからこう呟いた。そうして喉元に刃を当てる。だがその時だった。

子供が部屋に入って来た。彼に気付いて動きを止めた蝶々さんに駆け寄る。

「御前！？御前、どうして」

蝶々さんは我が子を見て思わず声をあげた。

「どうしてここに。どうして」

思わず我が子を抱き締める。抱き締めると涙が流れた。

「見せたくはないの。百合と薔薇の花の様な御前のその穢れのない

瞳に可哀想な蝶々が消えていくのを見せたくはないのよ」

子供を抱き締めながらの言葉であった。

「御前は海の向こうで幸せに生きて。お母さんに捨てられたと思われたくはないの。御前は御空から光に満ちて授かったのだから。だから」

我が子に自分の顔を見せる。そうして言うのだ。

「御前のお母さんの顔を。忘れないでね。だから」

最後の言葉だった。もういかなければならなかった。

「さようなら。これで」

我が子に反対側を向けさせてその手に日本とアメリカの国旗と人形を握らせる。その時にそっと目隠しもさせた。その間に子供をじっと見詰めた後で障子の向こうに消えて。そこから我が子のシルエツトを見つつ静かに喉に刃を突きつける。そうして。最後を迎えた。

短刀がゆっくりと落ちて生じが開いた。倒れた蝶々さんの手が最後の力で開けたのだ。その時に弱かったのか子供の目の目隠しが落ちていた。子供は蝶々さんに静かに寄って来る。倒れ伏し域も絶え絶えの蝶々さんも少しずつ我が子に近寄る。だがそれも適えられそうになかった。命の火が消えようとしていた。仏壇の火が消えていくのと合わせて。その力尽きて子供のすぐ側で動かなくなった。

「蝶々さん！！蝶々さん！！」

家の外からピンカートンの声が聞こえる。しかしもう遅かった。

何もかもが遅かった。全ては終わってしまったのだ。全てが。

蝶々夫人 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798h/>

蝶々夫人

2011年4月28日01時26分発行